



# 校長室だより

令和5年度  
11月17日  
NO. 32

## 本物に触れ 歴史を知り 社会を考える「修学旅行」

冷えた山肌から立ち上る山の霧が、新東名の秦梨大橋を包みます。少し遅れていた秋も次第に深まりを見せ、秦梨小を優しく包みます。修学旅行2日目朝、凍てつく清水の舞台でも、京都市内を隔てた遠くの山々にもうっすら靄がかかり、秋を映し出していました。

11月13日、14日の修学旅行は、6年生にとって、小学校生活唯一無二の、貴重な体験となりました。6年生は修学旅行に向けて、市販の観光ガイドに負けない自分たちの「修学旅行ガイドブック」を作りました。訪れる所々で開いて見て、調べたこと(知識)と実物を見て感じたこと(体験)を比べ、見聞を確かなものにしました。宿泊した東山荘の方には「とても朗らかで、温かく日頃の様子がよく分かりました」と言っていただき、6年生の温かく仲のよい姿は日頃と変わらず、協力的で主体的で明るく活動し、多くの収穫のある修学旅行となりました。

訪れた多くの昔の建物は、大きく高く壮大で、昔と変わらぬ姿を見せてくれました。千五百年以上も昔の、世界最古の建物が残る法隆寺は重厚できれいで、昔の人の思いや生活まで留めているようでした。東大寺大仏殿で見上げた大仏に、祈りを込める当時の人々と今の人々の姿は、その身なりこそ違えど、その大きさにご利益を願う思いは同じだったでしょう。切り立つ崖に、釘を使わず太い木を組み合わせて建てた清水の舞台からの景色は、時代の流れにより景観は少しずつ変わっていますが、その美しさは変わらず人の心をつかんだことでしょう。金箔を張り巡らせた金閣寺に、昔の人も目を見張ったことでしょう。多くの建物がひしめく京都の街中に広がる二条城は広く、その豪華絢爛で



倒される建築は、徳川の力を今に残しています。うぐいす張り廊下を歩く人の、足の冷たさや厳かな気持ちは、当時と変わっていないでしょう。

さらに、京都・奈良は、多様性の町でもありました。本来、神社やお寺は宗教的な施設で、そこを参拝する数多くの外国の人にとっては自分の信仰する宗教寺院ではありません。世界的には、宗教の違いを認めない

国もあります。それでも、お寺の人が笑顔で外国人に接したり、参詣に来る外国人も手を合わせてお参りをしたりするなど、人種や宗教、思想によって排除・差別せずに受け入れられる姿勢は、とても大切なことであると深く思いました。

人々の考えや生活が変わっていく中、昔のものを昔のまま残していくことは大変なことです。けれど、夜の八坂の塔のライトアップ事業は個人で行い、昔の街並み保存も各人が景観を考えて行うなど、寺院だけでなく町全体で保存活動をしています。その町や地域の、様々な思いを持つ人々が、その建物や歴史物に価値と誇り、昔の人への敬意を持ち、受け継いでいこうと強い意志を持っているからこそ、今も大切に守られてきたのだと感じます。まさに、子供たちが「ふるさと学習」を通して培ってきた考えとも、重なる部分があります。本物に触れ、歴史を知り、社会を考える、そんな修学旅行を子供たちは堪能してきました。

